

「働く意味」をどう教えるか

第一報：「働く意味」の認識と学生指導の枠組み

井上宏 大阪女子短期大学

1. はじめに

筆者は短期大学で秘書教育を行っているが、ビジネス入門教育としての性格上、「働く意味」について一定の時間を割いている。傍ら、就職委員会委員として学生の就職指導にも当たっている。それらを通じて、学生が「働く意味」をどのように考えているのか、気になることが多い。「何のために働くか」は、考えの深浅は別として、実社会に入るに当たって避けて通れない問題である。

最近新入社員の離職者が1年目で10万人に上り、3年で実に30%が離職するということが話題になっている。辞められる企業の方も大変だが、離職者の方も彼らなりに悩んでいることは確かだ。そして、その中には「自分は一体何のために働くのか」という項目が入っているはずである。それは、これから就職を控える学生の悩みでもある。

何のために働くのか、自分が何をしたいのか、自分の能力は何か、自己分析を求められても、それにはっきり答えられずコンプレックスを持っている学生が多い。また、はっきりした志望を持った学生でも、この経済状況ではそれがかなえられるとは限らず、挫折感を抱かざるを得ない。

本論はこの「働く意味」について、学生にとって何が問題であり、どのように指導すればよいかについて、考察するものである。

2. 二つの問題提起

2-1. 「自己実現」を「働く目的」と教えることについて

まず、第一の問題提起は「自己実現」についてである。学生は、高校・短大を通じて、自己実現が、働くことの最高の目的であると教えられている。マズロー(Maslow, A.H.)の欲求5段階説の影響が大きいからか、働くことは、生活の基盤であり、社会的分業への参加でもあるが、何よりも自己実現への道であると教わっている。筆者も、もちろんそう指導しているし、このことに割ける時間数は少ないのであっさりと通過してしまう。

そして、自己実現の意味としては、潜在能力の発揮、自分のやりたいことをす

る。好きなことができる，などと一般には捉えられている。例えば，第一学習社「高等学校・現代社会」では，「職業が『自分を生かす』自己実現の道であることも忘れてはならない。多くの人は，職業のなかで自分の才能をのばし，個性にみがきをかける」とある。

また，堺屋太一は日本経済新聞の「経済教室“自己実現社会を目指して”」（'99.1.22）で「多様化，個性化，ソフト化といわれるものの原動力とは何か それを一言でいうと，人々に選択の自由と創造の機会を与えることだ。もっと縮めていえば『自己実現』，つまり『好きなことができる』ということになるだろう。そうだとすれば，これからの日本が目指すべきは，『自己実現のしやすい社会』ということになるだろう」と述べている。

潜在能力を伸ばせ，好きなことをやれと言われて当惑する学生は意外に多い。自分には取り立てて能力もない，特にやりたいということもない，これでよいのか，と自問する。自分つまらない人間だと思ってしまうまじめな学生は多い。社会経済生産性本部の'98年新入社員意識調査でも仕事に「夢」を持つものは，女性 49.6%（20歳未満 44.6%）に止まっているのが現状である。

一方，安易に流れる学生は，特にやりたいことがなければ，縛られて働くことはない，当分フリーターで行こう，それでも当面食べるに困らない，その内本当に好きな仕事が見れるだろうという態度である。

偏差値偏重，4年制大学志向の中で短期大学に入学してくる学生には，能力面の挫折感を抱いているものが少なくない。「潜在能力の発揮」ということを強調すれば，このようなことになるのも，あるいはやむを得ないことかもしれない。

筆者はこのような事態を前にして，自己実現を前面に押し立てて指導することに疑問を感じるのである。

2 - 2 . 本来の自己実現とは

では，一般通説ではない本来の「自己実現」とはどのようなものとされているのか，2氏の著作から拾ってみる。

小林司は『生きがい』とは何かで自己実現をする人の性格としてマズロー（Maslow, A.H.）にしたがって8つの特徴をあげ，「以上を簡潔に言うならば，あるがままに人間らしく生きる，ということになる。これならば，特別な偉人でない私たち凡人にもできそうな気がする」と述べている。

しかし，次の項の「『汝，自身であれ』の実践」を読むと，とたんに凡人には近づきがたくなる。すなわち，「自己実現をした人というのは，才能，能力，可能性を十分に持ち，またそれらを開発していくことによって自分自身を完成し，自分のできる限りの最善を尽くしているように見え，自分の到達できる最も高度の状態に達し，あるいは発展しつつある人々であって，ニーチェの『汝，自身であれ』という言葉

思いおこさせる人達である。別の言葉で言えば、安全、所属、愛、承認、自尊などを求める基本的な情緒的な欲求と、また知識や理解を求める認知的要求が満たされた後に、初めて自己実現の欲求が出てくる。つまり安全であり安心していられる、受け容れられている、愛している、愛されている、尊敬し尊敬されていると感じており、また自分なりの哲学、宗教、価値観を完成している、という人が真の生きがいをもつことになる。基本的欲求が満たされているかどうか、もっと高次の欲求をどのていどに渴望しているかが、生きがいを求める強さとなって現われてくる」と言う。

さらに、「自己実現しつつある人々は、一人の例外もなしに自分自身の外にある何かに従事している。天職と呼ばばいいだろうか。ある人は生涯を法律に捧げ、ある人は正義に捧げ、また別の人は美や真理に捧げている。いずれにしても自分の生涯をマズローが『存在価値(B)』と呼んでいるそれ以上還元できないような本質的究極価値の探求に捧げているのである」と述べている。

20歳前の短期大学生に対して、仕事の中にこのような境地を求めよと言うのは、理想としても難しい話である。

河合隼雄は「ユング心理学入門」で、ユング(Jung, C.G.)のいう自己実現を次のように説明する。「われわれの意識も自我(ego)を中心として、ある程度の安定性を持ち、統合性をもっている。そして、このためにこそ、われわれは一個の人格として他人に認められているわけである。しかしながら、その安定した状態に人間の自我はとどまることなく、その安定性を崩してさえ、より高次の統合性へと志向する傾向が、人間の心のなかに認められる」。

さらに、「個人に内在する可能性を実現し、その自我を高次の全体性へと志向せしめる努力の過程をユングは個性化の過程(individuation process)、あるいは自己実現(self-realization)の過程と呼び、人生の究極の目的と考えた。そして、われわれが心理療法において目的とするところも、結局はこのことにほかならないのである」と説明している。

そしてまた、「自己実現はつねに発展してやまぬ過程であり、その過程そのものに大きい人生の意義がある」と述べている。

この「個人に内在する可能性」が単に能力のことを指すのではないことは明らかだが、理解しやすいものではないことも確かである。

我々は、「自己実現」ということを離れて「働く意味」を指導することはできないのだろうか。

2 - 3 . 補佐的業務について

第二の問題提起は、補佐的業務の「働きがい」についてである。筆者は企業で秘書を経験し、現在「秘書学」を講義しているが、欧米では秘書の社会的地位の凋落が甚だしいという。そのため、アメリカの秘書協会(Professional Secretaries Inter-

national)もその名称から秘書を外し International Association of Administrative Professionals に名称変更してしまった。そして、この流れは日本にも影響を与えつつある。

これは、女性の地位向上と共に、女性が補佐する立場より補佐される立場に回りたいという欲求が強くなったことが原因しているという。しかし、社会は補佐する人、補佐される人両方が存在することによって成り立っている。女性を補佐の立場に閉じこめておくのは確かにいけないかもしれないが、補佐の仕事自体を二流の仕事と見なすべきなのか、補佐の仕事にも仕事の喜びや成長があるはずであり、正当な評価が必要である。この問題に関するヒントは第一の問題を考察する過程で必ず出てくると考える。

以上、本研究では、働く意味をどう教えるのか、欧米と日本での働くことの意味・目的の相違、自己実現とは何か、自己実現が出てきた歴史的経緯、自己実現を最終目的として教えることの是非、等について、文化的・歴史的背景、生物学的背景、心理学的背景を踏まえ、いくつかの所説を紹介・検討しつつ、考察を加えたい。

経済環境の変化が日本の労働慣行を大きく変化させている現在、働くことの意味をどう教えるかを根本から、考え直してみる必要があると考える。

3 . 日欧 , 労働観の概観

3 - 1 . 欧米の労働観

現在の欧米の労働観には、当然のことながら歴史的・宗教的背景がある。ギリシャ時代には労働は蔑視されていた。労働は奴隷の仕事であり、市民にとっては自由時間における公的活動（政治・軍事）こそ価値があった。中世は宗教の時代であり、労働は祈りの時間を作り出すためにあった。宗教改革後は、労働は即祈りとなり、それによって得られた資本の蓄積が資本主義の発達をもたらしたことはマックス・ウェバー (Max Weber) の「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」に詳しい。近代には労働は自己実現をもたらす手段となった。精神分析学者ユングやマズローの考えかたについては先に見たとおりである。また、ホーソン実験や、マグレガー (McGregor, D.) の理論 (Y 理論) によって労働の心理学的側面が注目されるようになった。このような変遷を経て、ギリシャ時代の労働蔑視の伝統は今も息づいていると言われる。

3 - 2 . 日本の労働観

日本の労働観は今もアニミズム信仰（自然信仰）と石門心学の影響下にある。アニミズム信仰の影響により、日本人は仕事を通じて自然との一体感を求める。日本人にとって、仕事は聖・俗・遊の融合した存在である。ものを作ること即心を磨くこと。江戸初期の鈴木正三は、すべての職業は仏行であり、職業に貴賤はない、それは道である、また、利潤追求は目的でなく結果であるとした。

石田梅岩を始祖とする石門心学は、蔑視されていた「商」の仕事を社会のための不可欠な仕事として位置づけた。土農工商の仕事は役割の違いはあっても平等であるとした。また、労働することを人間の「性」であるとした。「形直に心なる所なり」「労働により己が生活を支えることは、梅岩にとっては、『人という形』に生まれた者が自然の秩序に従う道であった」(山本七平、「勤勉の哲学」)

この教えは商家の家訓に影響し、明治以降の日本人の労働観にも影響した。明治以降の日本の発展、戦争による米国の影響、高度成長とバブル、そしてその崩壊と環境はめまぐるしく変わり、我々の労働観も変化したように見えるが、依然同じ血液が我々の身体を流れているように思われる。

4. 労働の喜びについて

4-1. 欧米的「労働の喜び」

前項で述べた労働観の流れのなかで、まず、欧米の流れを汲む2氏の所説を紹介し・検討したい。(1)承認欲望

今村仁司は「近代の労働観」で、近代の「労働の喜び」論を批判し、「労働に内在する喜びは近代の人間主義的労働論の思いこみでしかない」とし、「実際の労働経験は、労働を手掛かりにするにしても、他人の評価をあくまで求める承認欲望によってすみずみまで浸透されている」と主張する。

また、労働からの解放、勤勉労働の縮小を説き、「無為と自由の時間のなかで、人ははじめて、自由な人格として、自律的な人間として、『共同の事物』について考え、自分の意見を他人たちの評価の対象としてもちだし、共に語り、検討し、討議することができる。共同の事物、公共的な事柄を思考し、公共的なものと自己との関係を構築し、それを公共空間のなかに投げだすといった行為が可能になるには、労働の拘束から解放されていなければならない」と、いわばギリシャ帰りの主張をしている。

今村は「他人からの賞賛」のみが「労働の喜び」であり、「他人の評価的視線がなく、したがって名誉をうる機会もないときには、職人の労働は、たとえ自分にとってだけの企てが見事に成就されることがあったとしても、単なる労苦でしかない」と言う。また、孤島のロビンソンのような孤立的個人が何かを企てて成功したときの喜びは遊戯の快樂であり、労働の喜びではないと断定するが、あまりにも一面的な見方ではないだろうか。

また、氏は1日3時間労働も夢ではなくなったとし、自由時間を公共の事柄に当てることを主張するが、環境の保護などを労働から切り離すべきなのか、筆者は疑問に思う。公共的な必要性をコストとして取り込みながら生活の豊かさを求めるには、本当はもっと働かなければならないのではないのか。労働からの解放はあり得ないと考え

(2) 共同善への貢献

杉村芳美は『『良い仕事』の思想』の中で、産業化・市場化・分業化が進むと共に労働・仕事は自己完結的なものでなくなり、かえって自己実現を求める傾向が強まったとしつつ、その喜びや満足感は、実は自己の外にあるものと結びついていることを見なければ、ありえない自己完結的過程と結果を空しく求めることになる。仕事の価値は他者や普遍との関わりにおいて生まれるから、仕事の喜びや満足感は「集団や社会の全体にとって望ましいことすなわち『共同善（共通善）』への貢献と結びついている」と言い、良い仕事の条件として1. 良い仕事は、仕事を意味あるものと見なすことを前提とする、以下10項目をあげている。

そして、「われわれの実際の仕事が良い仕事であることはめったにないし、良い仕事であることがいかに困難であるかを思い知らされる」という。しかし「このことは良い仕事がけっして不可能であることを意味しない。そして、実際の仕事が良い仕事と無縁であることも意味しない。むしろ、良い仕事は現在の仕事とどこか別のところにあるのではなく、現在の仕事そのものの中にあるとさえいえるかもしれない。なぜなら、ここで見た良い仕事の条件は、仕事の実際に大きく左右されるものもあるけれども、多くは仕事の内容によって決定されるよりも、仕事への姿勢によって決定されるといえるからだ」と述べている。自己実現における社会性の重要性を説き、また仕事への姿勢の大切さを強調している。

【参考】良い仕事の条件

良い仕事は、仕事を意味あるものと見なすことを前提とする。仕事に対する真剣で責任感ある態度を求める。生活の必要を充たす。他者に負担をかけず、働けないものを助け、他者に従属しない独立し自立した生活を可能にする。共同生活に貢献する。善い生き方と重なる。平衡のとれた生活とともにある。魅力的である。個人を成長させる。個人を超える価値につながる。求めてはじめて得られる。

4 - 2 . 日本的労働の喜び

(1) 宗教的行為

河合隼雄は欧米と日本の仕事観の違いについて述べ、日本人にとって、仕事は聖・俗・遊一体となったもので、宗教的行為ですらある。これが日本人のものづくり文化であるとしている。

すなわち、「何事も明確に区別して考えるのが好きな欧米人は、聖・俗・遊と人間の営為を三つに分類し、仕事は『俗』に属すると考える。したがって、人間が人間らしい豊かな生活をするためには、仕事の時間をできる限り少なくして、そこに生じてきた余りの時間に、宗教的な活動をしたり、遊ぶことによって人生を楽しんだりする、という考えが生まれてくる。しかも、『ホモ・ルーデンス』などということをホイジンガが言いはじめて、遊の世界は聖に通じるという論まで出てきたので、仕事の時間

を少なくすることは、ますます大切になってきた。これは欧米人の考えとしてよく了解できる。しかし、日本の実状はどうであろうか。こんなに割り切って考えるだろうか。例えば、昔からの職人の例をとつてみよう。職人氣質という言葉があるように、例えば板を一枚削るときも、その大工さんは精根を傾ける。建築の素材という考えからすれば、少しくらい厚さが違っていてもいいのかも知れない。しかし、その人にとっては、その板に自分の命を賭けている。とすると、この人のしているのは『俗』なのだろうか。『聖』なのだろうか。それは宗教的行為と言っていいのではなからうか。日本人の作る製品の質が極めて高いことの秘密に、こんなことが関係していると私は考えている。多くの仕事が日本人の宗教性とかかわっているのだ。(河合隼雄、「対話する家族」)

「日本人は、ものをつくるときに、それは心を磨くことと同一視する。従って『米づくり』が無意識的にしる『宗教的』行為になってくる。このような傾向は近代になってもそのまま継承され、車のパーツをつくるにしても、それはどこかで宗教的情熱へとつながってくるのである。かつて、米の一粒一粒に心血を注いだのと同じ姿勢をもって、近代工業のパーツのひとつひとつをつくるのに、欧米人の考え及ばない姿勢で臨むことになる。仕事と遊びを峻別したり、日常と非日常を明確に分けて考えるのではなくて、ものづくりに遊びも宗教も混入してくるのである。(河合隼雄、前掲書)

(2) 心の安楽

では、石門心学では労働の喜びをどう表現しているであろうか。「都鄙問答」で、農人の「行ひ」に関する質問に対して石田梅岩は言う「行ひと云は農人ならば、朝は未明より農に出て、夕には星を見て家に入。我身を勞して人を使ひ、春は耕し、夏は芸(くさぎり)、秋は蔵(おさむる)に至まで、田畠より五穀一粒なりとも、を、く作出(つくりだす)ことを忘れず、御年貢に不足なきやうにと思ひ、其余にて父母の衣食を足し、安楽に養(やしなひ)、諸事油断なく勉(つとむる)時は身は苦勞すといへども、邪(よこしま)なきゆへに心は安楽なり。身を肆(ほしいまま)にし、年貢不足する時は、心の苦(くるしみ)と成。我教所(われおしゆるところ)の心を知て、身を苦勞し勉(つとむ)れば、日々に安楽に至ることを知らむ。心を知て行ときは、自ら威儀正しくなり、安を知ることなれば、何をか疑むや」と。

山本七平は、「いわば労働により己が生活を支えることは、梅岩にとっては、『人という形』に生れた者が自然の秩序に従う道であった。いわば『馬という形』ならば草を食うような『心』が自然にそなわっているようなものである」と述べ、さらに、その心を持っているために労働をすれば『心は安楽になる』ということは、これは一種の本能的な行為なので、それが自然に対応する秩序であり、同時にそれが社会秩序のもとともなっていると説明している。(山本七平、「勤勉の哲学」)

5 . 社会生物学的考察

欧米の思考の系譜である「自己実現」の労働観も、日本の「石門心学」の労働観も、結局、「自然の秩序」「人間の本性」とは何かを求めようとしている。これを最近の生物学の考え方から探してみる。リチャード・ドーキンス (Richard Dawkins) の注目すべき著書「利己的な遺伝子」を軸とする。

5 - 1 . 利己的な遺伝子

彼は第1章で自らの説を要約している。「私がこれから述べるのは、成功した遺伝子に期待される特質のうちでもっとも重要なのは無情な利己主義である、ということである。ふつう、この遺伝子の利己主義は、個体の行動における利己主義を生み出す。しかし、いずれ述べるように、遺伝子が個体レベルにおけるある限られた形の利他主義を助長することによって、もっともよく自分自身の利己的な目標を達成できるような特別な状況も存在するのである」「われわれの遺伝子は、われわれに利己的であるように指図するが、われわれは必ずしも一生涯遺伝子に従うよう強制されているわけではない。確かに、利他主義を学ぶことは、遺伝的に利他主義であるようプログラムされている場合よりはずっと難しいであろう。しかし、「あらゆる動物の中でただ一つ、人間は文化によって、すなわち学習され、伝承された影響によって、支配されている」。

5 - 2 . 遺伝子の目的「拡大と継続」

彼は「生物は遺伝子を残すための生存機械」であると主張する。遺伝子の目的は、自己の複製を増殖すること、それを将来に亘って残していくことである。(このことを筆者は「遺伝子の拡大と継続」と呼ぶことにする)

遺伝子の乗り物である生存機械と生存機械のための決断をおこなう脳とにとってもっとも重要なのは、個体の生存と繁殖である。

彼の図式は次の通りである。「遺伝子の目的 = 拡大と継続 乗り物が拡大し継続することが遺伝子の拡大と継続につながる 乗り物の制御機械である脳が乗り物の拡大と継続を追求する それにより乗り物の拡大と継続が達成され、結果として遺伝子の拡大と継続が実現する」。

5 - 3 . 自意識の誕生と文化的伝達

この理論から、人間の性的な欲求も、権力的な欲求も「遺伝子の拡大と継続」のために必要な欲求であり、労働の欲求も生き残りのためには大切な欲求であることが理解できるが、では、自己実現の欲求や、労働において自己実現を求めることはどのように解釈できるのか。それは、脳が自意識を持ったためである。

脳の発達 「生存のためのシミュレーション能力の進化」 「脳による世界のシミュレーションが完全になって、それ自身のモデルを含めねばならぬほどになったと

き」「自意識の誕生」「意識とは、実行上の決定権をもつ生存機械が、究極的な主人である遺伝子から解放されるという進化傾向の極致」「脳は遺伝子の独裁に背く力さえそなえる」

このことが、実存主義で言う「人間がまず先に実存するものだということ、すなわち人間はまず、未来にむかってみずからを投げるものであり、未来のなかにみずからを投企することを意識するものである」(J.P.サルトル「実存主義とは何か」)につながっていくと筆者は考えるが別稿としたい。

このように投企され、人間によって作り出されたものが、人間から人間へと伝達されていく。ドーキンスは「人間は特殊な生存機械」であると言う。物理的遺伝子(ジーン gene)の乗り物であると共に、文化的伝達の単位(ミーム meme)の乗り物であるとも言う。

5 - 4 . 「拡大感」「継続感」の欲求

脳が自分自身の拡大感や継続感を求める。脳は自分の感知するあらゆる活動の中にそれを求める。脳は自分の「外界に対する力(支配力)の拡大」の意識、また自分の(そして、後継者の)「未来への継続」の意識を求める。これこそ「自己実現」への欲求ではないか。

自己の拡大感と継続感が人に満足感を生む「自己実現」と考えれば、必ずしも「潜在能力の発揮」にはとらわれない。親から受け継いだ仕事でも、会社での担当職務でも、当面好きな仕事でも、何でも自己実現を図ることができる。何で図るかは個人の選択の問題である。場合によれば天下の大泥棒になるということでも喜びを感じるかもしれない。

そして、個人の選択の結果は時間が経過することによって、グループ間の文化の差ともなっていく。例えば、余暇重視か労働重視か、また競争重視か協調重視かの差もそのようにしてできてきたと考えられる。

5 - 5 . 利他主義の戦略

しかし、ドーキンスが言うように利己的な動機であっても、お互い利他的に振る舞うというやり方は生存の戦略として安定的で優れていると考えられる。ドーキンスは「気のいい奴が一番になる」という表現で、互惠的利他主義が遺伝子生き残り戦略として有効であることをゲームの理論を用いて説明している。

彼は、遺伝子は長い腕を持っているとも言う。仲間の利益を考えた振る舞いは個体にとっても有利である。そして、日本社会は今までこちらのやり方を採用してきた。協調のミームが我々の文化として受け継がれてきた。しかし今、競争のミームが我々の文化でも優位になろうとしている。どちらが生き残り戦略として将来とも優れているのか、予測しがたいだけに我々の選択の問題である。

6. 「働く意味」を考える

以上を簡単に振り返りながら結論を出そう。

「自己実現」を目標とする労働観は、欧米における労働観の歴史的変遷の延長線上にある。欧米では余暇・自由時間での「聖」「遊」が重視され、「俗」である労働蔑視の伝統が今も息づいている。「自己実現」の思想といえども労働は手段に過ぎない。

それに対し、古来日本では、労働は「聖」「俗」「遊」一体のものである。「人という形」に生まれた者が自然の秩序に従う道であった。この労働観は今も我々の血の中を脈々と流れている。

これら彼我の労働観を社会生物学の知識を加味して見直してみると、以下のような見方ができる。

生物は遺伝子の乗り物に過ぎず、遺伝子は拡大と継続を志向する。脳はその乗り物のためのシミュレーション装置である。脳はシミュレーションの中にそれ自身を含めねばならなくなり、意識が生じた。

脳は拡大感と継続感を求める。この拡大感・継続感は「潜在能力の発揮」だけでもたらされるものではない。どのような労働、どのような遊びによっても可能である。

遺伝子の生き残り戦略として、利他的行動は優れた戦略である。したがって、たとえ利己的動機からであっても、社会に貢献するような方向で自らの拡大感と継続感を図るべきである。

また、人間は物理的遺伝子の乗り物であると同時に、文化的伝達の単位（ミーム）の乗り物でもあるという特殊な生物である。日本人としてのミームは、労働によってこそ、「拡大感」「継続感」を実感することができる。筆者はこれが日本における「自己実現」であると考える。

以上、欧米の系譜の中からも、そして日本の系譜の中からも、また最新の社会生物学の知識からも、「働く意味」や「自己実現」の、単なる「潜在能力の発揮」や「好きなことをやる」などとは違った姿が見えてくる。それは、突き詰めて言えば、「働く喜び」や「自己実現」は「社会の中で、何らかの役割を果たすべく格闘する」中からこそ生まれてくるものではないかということである。役割が何であるかは選択できる場合もできない場合もあるだろう。しかし、役割が何であれ、それと格闘するという姿勢こそが大切なのである。

7. 学生をいかに指導するか

したがって学生には、「社会の中で、まず何らかの役割を担うこと、それを、納得できるように達成するために格闘すること、その中から何かが生まれてくる。自己実

現という言葉にとらわれるな。最初から夢がなくても良い。能力が不足していても良い。いたずらに青い鳥を追いかけるな。「本当の自分」とか、「潜在能力」などないと思え。自分の仕事は『周りの人達の役に立っているか』『社会の役に立っているか』を念頭に置きながら、現実と格闘する中から自分なりの自己実現が生まれてくる」と教えたい。

もちろん、このことは組織への埋没を奨励するものではない。個人と組織の関係は、遺伝子とその乗り物である生物体との関係に相当する。個人が組織のために行動するのは、あくまでそれが個人やその子孫の長期的利益（経済面のみでなく、生存のための環境面、さらに信条等も含め）に合致するからでなければならない。

はじめから就職することを嫌い、フリーターで良いとする学生がいる。彼らは働くという現実の中に身を置きたくない、現実から逃避したいといっているのに等しい。彼らにとって、働くということは「苦」でしかなく、遊びの中に何時までも身を置いていたいと思っている。

しかし、文化における遊びの重要性を強調したホイジンガ(Huizinga, J.)やカイヨワ(Caillois, R.)は、遊びの本質について次のように述べている。

ホイジンガ「従って、要するに、形態という角度からすれば、遊びとは、フィクションである、日常生活の枠外にある、と知りながら、遊ぶ人を全面的に捕らえ得る自由な活動、いかなる物質的利害も、いかなる効用も持たず、明確に限定された時空の中で完了し、与えられたルールに従って整然と進行し、好んで自己を神秘で取り囲んだり、仮装によって日常世界に対する自己の無縁を強調したりする集団関係を人生の中に出現させる活動である」

カイヨワ「遊びが存在するのは、遊ぶ人が、たとえ極度の集中を要する遊び、非常に疲れる遊びであろうと、そこで気晴らしをするため、気苦労から逃れるため、つまり、現実生活から逃避するために遊ぶことを欲し、そして遊ぶ時だけである。さらに、特に、遊ぶ人は、好きな時に、『もうやめた』と言って、立ち去る自由を持たなければならない」

遊びは逃避である。確かに遊びからも自己の拡大感・継続感は得られるが、それは現実（労働）から得られる喜びとは異質である。学生は、現実があってこそ遊びは面白いのだということを知らねばならない。

8. 補佐的工作について

補佐的工作について触れたい。冒頭でも述べたように秘書のような補佐的工作は現在人気が下落している。「働く喜び」の少ない仕事と見られているようだ。確かに今村仁司のように、それが他者からの賞賛で成り立っているという説からすればそうなるだろう。他の目を意識しては補佐の役目が果たせない場合さえある。しかし、我々は既に労働の喜びが自己の拡大感・継続感で得られることを知った。そして、拡大感・

継続感とは他からの賞賛のみで得られるものではない。社会に一人で達成できる仕事は少ない。リーダーには補佐役が必要であり、補佐役にはリーダーが必要である。協働を通じて目的を達成することで自己の拡大感を得ることはいくらかでもある。秘書を志す人は自信を持ってほしいと思う。

9. おわりに

9 - 1 . 今後の研究の方向

以上、「働く意味」を「どう教えるか」について考察してきた。

「どう」の中には「教える内容」と「教え方」の両方の意味が入っている。前者つまり、「働く意味」そのものについては、今回の歴史的・文化的、社会生物学的考察により、かなり明らかにし得たと考える。

一方、後者つまり「如何に伝えるか」については今後課題が残された形となった。社会生物学的アプローチは、教員自身の考察の方法としては意味があると信じるが、これを短期大学生にストレートにぶつけても、理解を得るのは難しいかもしれない。これで得られた結果・内容を理解しやすいように学生に伝える工夫が必要かもしれない。

それには、上から教え込むのではなく、学生自身に気づかせる方法を探るべきであろう。そのためには、どのような指導法がよいのか。筆者は今回の研究を足がかりとして、方策を探っていきたいと考えている。

本学会の特色の一つは資質教育にあるわけであるが、ビジネス社会で必要とする資質の向上をはかるには、学生に「働く意味」を積極的に捉えさせ、勉学の意欲を引き出すことが大切である。多くの教科書で、「働く意味」をまず最初に取り上げているのも、その理由からであろう。

その意味で、筆者は今回研究成果を第一報として、さらに報告を重ねたいと考えている。

9 - 2 . おわりに

最後に、再度強調したいのは、『働く喜び』に能力の高低は関係ない。社会との関わりの中で、何らかの役割を引き受け、それを果たすために格闘することから『働く喜び』が生まれてくる。自分以外のもののためという姿勢が結局自分のために大きな実りをもたらしてくれる」ということである。

一口に「働く意味」といっても、この数十年の間に随分と変化してきた。その中でも我々の受け継いだ伝統は我々の血管を脈々と流れている。それは欧米の伝統とは異にしたものである。しかし、それも我々の生物としての枠組みを逃れるものではない。この点に関して社会生物学の知識は貴重な示唆を与えてくれる。筆者はこのような学際的な考察を今後も試みていくつもりである。

< 引用文献 >

- 第一学習社,「高等学校・現代社会」,1999,
p.29
- 堺屋太一,「経済教室“自己実現社会”」,日本経済新聞,1999.1.22
- 小林司,「『生きがい』とは何か」,日本放送出版協会,1997,pp.117-118,p.228
- 河合隼雄,「ユング心理学入門」,1970,p.220,p.228
- 山本七平,「勤勉の哲学」,PHP研究所,1979,pp193-194
- 今村仁司,「近代の労働観」,岩波書店,1998,p.186
- 杉村芳美,「『良い仕事』の思想」,中央公論社,1997,p.210
- 河合隼雄,「対話する家族」,潮出版社,1997,pp.155-156,p.170
- 柴田實編,「石田梅岩全集,上」,清文堂出版,1972,p.10
- リチャード・ドーキンス(Richard Dawkins),日高敏隆他訳,「利己的な遺伝子」,
紀伊国屋書店1991,pp.17-19,p.103,p.306,pp.322-373,p.114
- J.P.サルトル,伊吹武彦訳,「実存主義とは何か」,人文書院,1961,p.20
- R.カイヨワ(Caillois, R.),清水幾太郎他訳,「遊びと人間」,岩波書店,1970,
p.4,p.8

* 引用文中下線は本論文執筆者による。

< 参考文献 >

- 阿満利麿,「日本人はなぜ無宗教なのか」,筑摩書房,1997
- 石川謙,「石田梅岩と『都鄙問答』」,岩波書店,1993
- 中村幸彦校注,「近世町人思想」,岩波書店,1996
- 武田晴人,「日本人の経済観念」,岩波書店,1999
- デリク・デントン(Denton,D),大野忠雄他訳,「動物の意識,人間の意識」,紀伊
国屋書店,1998
- 立花隆・利根川進,「精神と物質」,文芸春秋,1991